国士舘と柴田徳次郎

Kokushikan and Tokujiro Shibata

泉　賢司
Kenshi Izumi

はじめに

私は20年前（昭和61年1986）と15年前（平成3年1991），徳次郎先生の生家を訪れた事があります。訪れたと言っても，生家の中には入らずに外観とお墓詣りをして来ましたが，生家の丘の上にあった大きな山桃の木が印象的でした。

国士舘の敷地内に館長の住まい（館宅）があったが，その庭の中心にも大きな山桃の木があった。頭山満翁も生家の庭に一本の楠の木を植えたり，又，後年渋谷の常磐松に移り住む時も庭に一本の桐の木を植えている。この事からも創立者柴田徳次郎先生も頭山満翁と同じで，幼少の頃の想いを一本の木に託しているのかもしれない。あるいは山桃の木に対する敬慕の念からでしょうか。共に，共通する点があるように感じられます。

昭和52年頃，当時国士舘大学施設課課長が，柴田館長の話しをしてくれたことがあった。校庭の木が生い茂っているので，植木屋に頼んで木の剪定をしていたところ，館長が現れて「何をしておるんだ，木を切ってはいかん！枝を切るということは，人間で言えば手足をもぎ取られるのと同じ事だ、即やめろ」と言われ，その後こっぴどく叱られたという話をしてくれたことを想い出した。徳次郎先生の人間性の一端をかいまみることができる。

やむにやまれぬ憂国の士の発露として設立された国士舘大学も，今年で87年を迎えることになりました。柴田徳次郎は，幾たびかの困難を乗り越えながら私塾から青少年の健全な育成を願い，又，「我が国の教育の理想を探求するために国士舘を創設された。国士舘設立主旨には，物質文明の幣，日に甚だしく人は唯だ科学智を重んじて，徳性の涵養を忘る。今日に於いて教育とは，只科学の売買たるのみ。かくの如きは唯だ物質文明に終わる。精神文明なくして国家に一日の安きを得んや。蓋し精神文明は，物質文明を統一指揮するものなり。精巧の武器，万種羅列するも，兵士起って之を運用するに非るよりは，戦場に何の効果なからん。吾人は精神文明と精神教育とを此の際に唱導して国家の柱石たる真知識を養成せん事を期す。一国の最高学府は未だ天下に公開されざるなり。若し公開さるるとするも，ノート式の講義は畢竟死学のみ。其説く処高遠深遠なるが如きも，遂に之れ形式範疇のみ，何等の情熱なく，信念

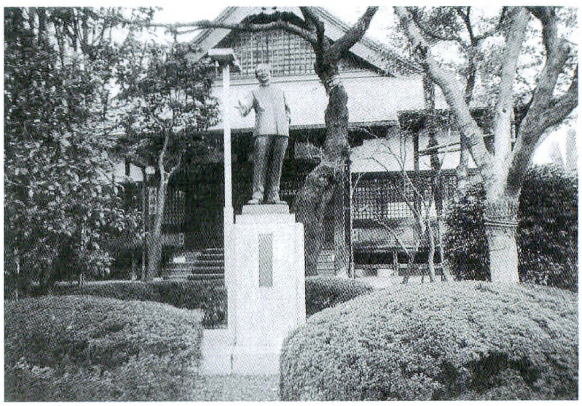
なく，人を教化するの力なし。形式，規則，規律，試験，之れ今日の所謂教育なるものなり」・・・・・と明記されています。

我国は，敗戦によって180度の転換を余儀なくされ，而もそれは民主主義の名の下に，日本民族の心の支柱である日本精神をも屈曲し，魂の抜けた日本人を造ることに重点が置かれ，次代の日本を担う大学生までもが自国の歴史を軽悔している現状を見るとき，日本の教育の誤ちをつうせつに感じる。国士舘は，皇室を敬い，国家を重んじ，歴史と伝統を守らんとする精神の上に，建学の理想を打ちたてて来た。このような創立者柴田徳次郎先生が残された講演や，訓話や，語録をもとに考察致します。

「風雪七十年」柴田徳次郎講演禄

柴田徳次郎（14歳までの生い立ち）

柴田徳次郎は明治23年2月20日（1890）に福岡県筑紫郡那珂川町別所（旧那珂川郡別所村），福岡県と佐賀県の境にまたがる背振山（標高1055）の東北麗の山村。北は福岡市南区に東は大野城市に接し，二日市を超えて約15kmで太宰府天満宮に至る所ですが。父，高木久太郎，武家養子に行き柴田宅兵衛と改名，母，フテの4男として生をうけた。その年，日本で初めての国会が開かれたが，平和な村でも政党の争いが始まりだした。父久太郎はその当時村長をしていて，この辺一帯の保守党の首領で，火付け強盗自由党と呼ばれていた反対党を押さえていたが，明治33年（1900）伊藤博文公が自由党を政友会と改名してその総裁となり，4度目の総裁となった時に情勢はたちまちがらっと変わり，父，久太郎は村長を辞め，同志の小学校の校長初め一人残らず入れ代えさせられた。それまで徳次郎宅は，学校の先生や，村の更員や，近郷の有志のクラブなどの客で年中相談会や，酒盛りや，泊まり客などで実に華やかであったが，政党が変わったとたん急に火の消えたようになった。又，父は村長という立場であったが，友人や同志に頼まれればいやとは言えず，借金の保証人になったり，山や，田まで売って人に貸していたという。



校庭内の大講堂と柴田館長銅像

温情な姉の激励

山の木の葉が黄ばむ，11月初めの土曜日の午後，1里ほど離れた小笠木峠の路端

でアケビを取って遊んでいた時，通りがかりの隣家の産婆さんに「徳次郎さん，おおごとがおきとりますばい，アケビなど取って遊んでいる場合じゃありませんばい，お父さんの借金の代わりに，裁判所から差し押さえに来てタンスも長持ちも全部紙で封印して，田圃（たんぼ）の稲には縄張って刈られぬごとしなさった。お父さんも，お母さんも留守で，姉さんがたった一人で泣いていなさる。早く帰ってやんなさねば」と教えてくれた。

徳次郎は取ったアケビは投げ捨てて，いちもくさんに家に帰ってみると，秋の夕暮れ時の薄暗い家の中に10歳年上の姉が淋しそうにうつむいて，夕飯の支度をしていた。いつもなら「おかえりなさい」と笑顔で迎えてくれるのに，黙って涙をためている。その姉の姿を見た時に，徳次郎は「畜生，臼杵丈平じゃろう，喧嘩してくる」と叫んで，父のステッキを持って飛び出そうとした。臼杵丈平とは，この村の金貸しであった。それまで一言も物言わなかった姉が急に立ち上がり，徳次郎を抱きとめ「貴方がしなさることは喧嘩ではありません，勉強です。悪いのは臼杵丈平さんではありません。お父さんです。お父さんは友達に頼まれれば，先祖様の山も田も売り，お母さんの積金までも取り出させて，人様におやりになる。その金高は大層にのぼるそうです。反対党（政友会）の人達はお父さんが伊勢詣りで長い留守のことを知っていやがらせしてござる。お父さんが帰ったなら，山なり，田なり売って片付けなさるでしょう。貴方は悔しかったら，一生懸命勉強して敵対している人達を見返してやる立派な人におなりなさい。反対党の人達は小柴田（徳次郎）はまだ子供だから，今に良くなればうんと良くなる，悪くなればうんと悪くなる，石川五右衛門よりも大悪人になりかねないと噂さしていることを聞いているでしょう。あれは貴方が悪人になればいいという憎しみの言葉です。貴方は何時か私に木下藤吉郎の話を聞かせましたね。あの藤吉郎に負けないように勉強しなさい。そうして今日のくちおしさを取り返しなさい。私の分も取り返して下さい。どんなことがあっても悪い事をしてはなりません。悪い人になってはいけません。差し押さえされたことは大変恥ずかしいことですが，これはお父さんが片付けなさるでしょう。」と今まで見せたことのない，まるで別人のようなきつい眼つきと，激しい言葉で懇々と説き教えた。

それまでは無邪気な徳次郎であったが，この時から深刻に考える徳次郎に変わった。今までは，柴田の千畳敷と言われ近村で一番裕福な家であったが，一夜にして村一番の貧乏家であることを，まざまざと知らされた。しかし，そう思って近隣を見渡すと，どの家も100坪足らずの土地に住居も小さく，生活状態もぐっと劣っており，差し押さえされるだけの借金の出来ない貧しい家ばかりじゃあないか，そういう眼で見ると，富んだ人は少なくて貧乏人ばかり目につく。この分だと日本中には定めし貧乏人が沢

山いるに違いないと考えるようになった。

佐倉宗五郎になろうと決心

そこで徳次郎は日本全国の貧乏人を救済しようと決意し，佐倉宗五郎になろうと夢想するようになりました。佐倉宗五郎は，徳川四代将軍家綱の時代，下総国（千葉県）印旛郡佐倉城主，堀田正盛の領分で，300人の名主の総代を務めていた。何万人の貧乏百姓の死の苦しみを救うために，国法を冒して将軍に直訴して助けてやりました。その代わり男の子4人が打ち首になり，自分ら夫婦は，はりつけになって殺された。徳次郎は，この事を講談本で読んだり，村芝居で見たりしてそっと涙を拭いたことがあった。自分の家丈の貧乏を救うぐらいではつまらない。日本中の貧乏人を救う佐倉宗五郎になろう。豊臣秀吉のような佐倉宗五郎になろうと決心した。それからは家庭の事は何も心配せぬ事に決めた。生きていると思うと何のかんのとつまらぬ事を考えるから，いっそのこと「徳次郎は12歳で死んだ事にしよう」と考えた。

中学校へは出してもらえないから独学で勉学に励んだ。4年生の教科書は3年生の3学期に全部筆記したり，父が読んだ日本政記，日本外史は父に習い，源平盛衰記，太平記，神皇正統記は自分一人で読んだ。4年卒業記念の清書は，友池先生（父の親友で別府小学校の校長）の勧めで「臨時不和難殺身全節」（国のためには，どんな困難にもぶつかって行け，首を切られても正義を貫け）と加藤司書公遺訓の精神を書かされた。

14歳の3月，卒業と同時に東京行きの旅費作りのために，父の所有する山の木を切り薪を作り，三里半あまりの道のりを博多まで荷車で売りに行ったり，病院の薬局生になったりして，お金を貯めて上京の準備をした。

徳次郎上京する（苦学生，新聞配達，牛乳配達）

徳次郎は明治38年2月8日（1905）に門出した。汽車で博多から新橋まで2日3晩乗り通し，呉からは日露戦争に勝って凱旋する兵隊と同車で，駅毎に「万歳，万歳」の歓喜の声を聞きながら2月11日の紀元節の日に東京入りした。徳次郎15歳の誕生日を迎える10日前の事だった。12歳年上で日本大学の法科に通う次男（次男は高木家に養子に行って高木波次郎）つまり兄のアルバイト先，山王下の万朝報支店（新聞配達店）に落ち着くことになった。

その晩から先輩に京橋弓町の万朝報本社へ連れて行かれ，翌朝は配達に連れて行かれ，翌朝からは順路張を頼りに一人で配達を始めた。月給は6円，集金料，勧誘料，号外料を加えると月7円50銭ぐらいになった。弁当代が1日3食で15銭1ヶ月合計4円50銭，残り3円で神田の正則英語に徒歩で1時間の道のりを午前8時から正午まで，又，夕方6時から9時までは普通科へと，一日2回通学した。

明治40年（1907）に芝中学3年に編入学した。ところが新聞配達は記事の都合で時々授業に遅刻する事が有ったので，その年末から，ツテを得て，牛乳1合につき2銭1里で分けて貰い，4銭で売る牛乳配達に転職した。新聞の得意先に頼み込んで10軒で一升ぐらいは買い手が出来たが，普通の家庭にはみな有名な牛乳屋が長く売り込んでいて，学生のニワカ牛乳屋の入りこむ余地はない。そこで同郷の偉い人に会って，修養にもなるから牛乳を勧誘しようと考えた。

頭山翁，野田卯太郎先生との出会い

まず第一に頭に浮かんだのが頭山満翁であった。赤坂霊南坂の頭山邸を夜間訪問してお願いしたところ，頭山翁は「牛乳は滋養に飲むから，銭をやろう」と言われた。「先生は滋養とおっしゃるが，私は生きるか死ぬかです。私は今中学ですが，大学まで行く考えです。銭を頂きましても雨溜りの水のように長く続きません。少なくても泉のようにぜひ牛乳を飲んで下さい。」と一生懸命に頼んだ。頭山翁は「ホッ，ホッ，また来い」と言われた。実に貫禄のある豪傑と感じた。今度は日曜日の昼間にお訪ねしたら，手を叩いて女中を呼び「ミネを呼べ」と命ぜられ，40歳ぐらいの上品な美しい婦人が「何の御用ですか」と尋ねられた，頭山翁は4本の指を握り込んで親指だけを私の方に指し出されて，これの牛乳を取ってやれと言われた。ご婦人は「何ですな，牛乳ですな，牛乳は四谷の永松から取っておりますから，もう要りません」と答えられた。頭山翁は「取ってやれ」とまた力強く言われた，ご婦人も「どちらからですか」とお尋ねになるから，今度は私ですと申して，永松牛乳を断って頂いて翌々日から毎日5合ずつ配達することになった。そのご婦人こそ頭山翁の奥様であった。頭山翁は御生前「柴田はひどい奴，俺の口を無理にコジ開けて牛乳を飲ませた」と，よく人に語られた。

大講堂内の野田卯太郎翁額

野田卯太郎先生も偉い政治家と聞いていたので，麻布材木町の自宅を訪問して頼んだ処快く取って下さった。又，朝鮮の総理大臣をされた鶴原定吉先生への紹介を願ったら「衆議院議員野田卯太郎」という名刺に紹介状を書いてくれた。それを持って赤坂丹後町の鶴原先生のお宅を訪ねたら，牛乳5合を取って頂いた。その御礼に，野田先生を訪ねた処「まあ

こちらえ」と言われるので応接間に上がったら「実は私は野田のせがれの俊作です。父に無断で鶴原さんに紹介したので，父が鶴原さんに会った時，君が紹介した柴田という書生はどんな男かと聞かれたため，父は「君はどんな男と思ったか」と聞き返したら，鶴原さんが「うん，よさそうな書生じゃった」と言われたので，「それなら牛乳を取っておいてくれ」と父が言ったそうです。と長男の野田俊作さんが話された。

野田卯太郎（号・大魂）1853－1927

福岡県出身，明治，大正の政治家，実業家，1898 衆議院議員　信大臣，商工大臣を歴任，この間三池紡績，中央新聞社長，三池銀行，福岡農工銀行などの重役を兼ねた。国士舘創設に当たり，財政面での財界との繋ぎ役として貢献してくれた。大講堂には等身大の写真額が今でも飾られている。

野田俊作　1886－1968

野田卯太郎の長男　昭和期の政党政治家，1924 年以来　衆議院議員 6 回当選，戦後福岡県知事から参議院に 3 回当選　緑風会後に自民党，参議院外務委員長などに就いた。その間，国士舘顧問，維持会員として学園運営上の良き理解者になった。

頭山，野田両先生と知己になってからは，長男俊作，次男四太郎，三男秀助様の所へ夜には相撲を取りに行くようになった。卯太郎先生からは「そんなに骨をおらぬでも学費を出してやろう」とか「書生にしてやろう」と言われたが断った。又，「親類に名家がある，養子に行かないかと」と言われたがこれも断った。早稲田を卒業した時には，「三井物産に入れてやろう」と言われたがこれも断った。独力でやり抜く意志が強いだけに，郷土の両先輩に深い感銘を与えたのだろう。両先生の伝手で，販売の拡大は出来たが，得意先の取り合いで「貴様は俺の得意先を取った」などと言いがかりを付けられ，殴り合いの喧嘩まで仕掛けられた。これが丸 3 年も続くので応対に心が疲れた。又，起床は夏は午前 2 時，冬は 3 時，掃除，牛洗い，搾乳，消毒，配達，終わるのは夏は 6 時，冬は 7 時，それから自炊，朝食，駆け足で登校，昼食抜きで午後 3 時半放課後，4 時半昼食兼夕食，午後の配達，空き瓶洗い，就寝は 10 時過ぎ，重労働の割には収入も少なく，たまに牛乳は飲むが面倒だから肉も野菜もタクワンも食わず，副食は牛に食わせる紅色の塩だけだった。元気を出すため飯の炊ける間に，韓退之の勧学の詩か文天祥と藤田東湖の正気の歌を朗吟して元気をつけた。

韓退之の漢詩とは「盛年重ねて来たらず。一日再び晨なり難し。時に及んでまさに勉励すべし。歳月人を待たず。」

文天祥の正気の歌とは「天地正気有り。雑然として流形を賦す。下は則ち下嶽と為す。上は則ち日星と為る。人に於いては浩然と日い。沛乎として蒼冥に塞つ。皇路清夷に当たり。和を含んで明廷に吐く。時窮まりて節乃ち見われ。一，一丹青に垂る。・・

・・」

藤田東湖の正気の歌とは「天地正大の気。粋然として神州に鍾まる。秀でては不二の嶽と為り，巍々千秋に聳ゆ。注いでは大瀛の水と為り，洋々八州を環る。発しては万朶の桜と為り，衆芳与に儔し難し。凝っては百錬の鉄と為り，鋭利ぼうを断つ可し。尽臣みな熊羆。武夫尽く好仇。神州孰か君臨す。万古天皇を仰ぐ。・・・・」

しかし，上京5年目，中学を卒業して5月に仙台の第2高等学校を受験したが失敗した。翌年，明治44年5月再度挑戦したが失敗してしまった。日比谷の図書館に法律書や歴史伝記書を勉強し始めた夏頃から，粗食がたたってか，栄養失調で衰弱しきってノイローゼになってしまった。寝ては喧嘩の夢ばかり見て汗をかき，昼は歩きながら天が落ちはせぬか，道に穴があきはしないかなどと心配して，頭痛がして眼がかすんだ。思案の末，その頃出来たばかりの代々木練兵場に夜中に行って，静かに考え始めた。天が柴田に大任を下すための試練ではあるまいかと考えてみたが，誰も証言してくれない。天はどこにあるやら分かりもせぬ。郷里を出る時の佐倉宗五郎，豊臣秀吉になろうという意気込みも消えうせてしまった。

自殺を決意

どうせ死んだつもりで東京に出て来たんだから，無念残念だけど自分一人で死のう。そう決めたら今夜死のうと考え，水無し橋（明治神宮橋の一つ手前渋谷寄り）の下の線路を枕にして寝ていたらきっと死ねると覚悟をきめ，その土手に行って座り，気を落ち着けようと何度も唾を呑み込んでふと空を仰ぐと，十五夜か十六夜かまん丸い月が出ていた。

秋の月は寂しいという歌の文句とは違い温かそうな気がした刹那，その月が母の笑顔になり「徳次郎さん」と呼ぶ。その声で私は「そうだ母がいた，世間の者はアラばかり探して，悪口ばかり言い毛程の親切を棒程に吹聴して恩にきせるが，母は長男が日清役の旅順の戦いで負傷した時は，夜中断食でむこ姪の浜の愛宕神社，筥崎八幡宮に往復十里近くも裸足参りの祈願をこめた。僕が病気の時も幾夜も幾夜も帯をとかずに看護してくれた。親切にするばかり，可愛がるばかりで毛程も恩をきせず，御礼をくれとも言わぬ」。そうだ！東京中，日本中の者が冷血・無情でも母がいる，姉もいる。毎月母と姉宛に「お変わりありませんか，御大事に私も元気に勉強しております，御安心下さい。」と葉書を出しておりながら，それは形式だけで心では忘れていた。ああ何と馬鹿げたことか，僕は他人から親切を受けることばかり求めて，他人のために尽くすことは何一つ考えておらぬ。佐倉宗五郎は，身を殺して人のために尽くしたが，人に何を求めたか？僕はとんだ佐倉宗五郎だ。母が産みの子を無償の愛で育て，塵ほども報いを求めない心で，困っている人，頼りの無い人々に親切を尽くすことを

心がけよう。心の持ち方一つで母心はいくらでも施すことが出来る。他人を恨んではいけない，むしろ思いやりを持って人の為につくそう。ほんとうの佐倉宗五郎になろうと決心した。その瞬間，急に頭が軽くなり，心が楽になり，からだに羽根が生えてふわふわと空を飛べるような気になり，嬉しくなり，これは自分一人で味わうにはもったいない，世間の多くの人々にも味わってもらおう，そうだ！「思いやり会」を作ろうと決心し，明日から実行しようと考えた。

思いやり会発足

そう考えると，天に昇る気持ちで，早速翌晩，頭山翁を訪ね「思いやり会」の主旨を話し，会長を願ったら，頭山翁は頷(うなづ)いて「それはよいところに気づいた。思いやるということは，孔子の忠恕(ちゅうじょ)の道じゃ，心の道の火がついたのじゃ，心の道の火は，水の中から火を出すようにむずかしいもので，世の中の人は考えても見ない。しかし水の中の石を拾い上げて，激しく打てば必ず火は出る。一旦火が出れば燃える材料は幾らでもある。生木でも燃える。いや生木程よく燃える。俺も会員になる。会長には柴田がなれ，そうして開祖の坊主に負けぬ気でやり抜け」と励まされた。

早稲田大学に入学

明治 45 年（1912）明治最後の年，明治天皇が 7 月 30 日に崩御され年号が「大正」と改元された年である。その頃徳次郎の郷里の母は 60 歳を越し，父は 65 歳になる。行先き短い父母を悦ばす目当ては何もない。大学に入って卒業証書を見せたらと思案をきめ，早稲田大学に入学した。入学して柔道部に入部して，宮川一貫 4 段，田中健介 3 段に稽古をつけてもらった。寒稽古は大寒の 2 時に起き，4 時までに牛乳の配達を終え，2 里ほどある戸塚の道場へ駆けつけ，満 3 年間皆勤，卒業の時は当時学生最上級 3 段になった。又，筑前学生会に出席して，中野正剛，（4 歳年上）緒方竹虎（2 歳年上）（朝日新聞社記者）を知った。

学生時代 柴田館長（右） 田中健介氏（左）

中野正剛 1886－1943（明治 19ー昭和 18）福岡県・　大正・昭和の政治家

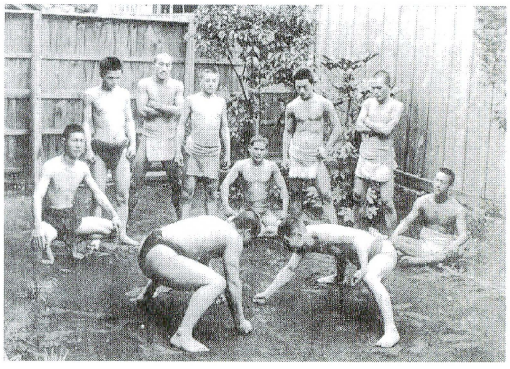
1920 年以来衆議議員に 8 回当選，第二次世界大戦中東條内閣に反対し憲兵隊に検挙され，釈放直後割腹自殺した。創立当時から国士舘をしばしば訪れ，学生に時事問題を啓蒙した。

大講堂内の緒方竹虎先生額

緒方竹虎 1888－1956（明治 21ー昭和 31）山県県・　昭和の政治家

朝日新聞社取締役を経て，1944 年小磯内閣国務省兼情報局総裁・東久邇内閣で国務省兼内閣書記官長として終戦処理にあたる。戦後，追放解除後，1952 年福岡県から衆議議員に当選。第 4 次吉田内閣官房長官，第 5 次吉田内閣副総裁，自由党総裁，1955 年保守合同後自民党総裁と目されたが 1956 年 1 月 28 日急逝した。昭和 27 年国士舘再建趣意書を自ら執筆する。

大民塾時代　左より 3 人目



大民塾時代　土俵の右

大民社創立

大正 2 年 4 月 3 日（1913）中野正剛，緒方竹虎，田中健介，中山博道，長岡五段，頭山満，三浦悟郎楼子爵等 20～30 名の同志で麹町飯田河岸の富士見楼で大民社を発会した。設立主旨を述べ「さて，今や東洋の形勢は・・・」ということで会は成立して，酒宴になったが，中野正剛と喧嘩になってしまった。三浦梧　将軍（1846～1926・明治時代の陸軍軍人，政治家，学習院院長，顧問官，韓国公使などを歴任。政界の黒幕として辛亥革命に関与した。）に「もう合いこじゃ，やめろ，柴田もあとに根をもつな」と，留められ，頭山先生の「ああ，柴田はそんなつまらぬ事で根を持つような

卑法者でない」の仲裁で事はおさまるが，その後は緒方，中野とは無二の同志となった。そして「思いやり会」はこの「大民会」に発展解消された。

青年大民団主旨

今や内外多事，皇国の隆頽は一つに係って吾人の双肩にあり，見よ天下は滔々として虚偽軽薄に流れ，剛健質実の気風は全然跡を絶ち，殊に似非文明の思潮は益々険悪に，固有の民性は方に地を払はんとす，其の如くんば，かけまくも皇室の尊厳を傷つけ，延いて皇室の前途を危うせんとす，実に冷汗恐懼の至りならずや，奉公愛国の士，正に蹶然噴起すべきの秋にあらずして何ぞ。是れ吾人青年が国家の柱石となり，勇往邁進せざる可からざる所以なり。顧みるに国家将来の鴻図を期し，刻苦砥礪以て志操を錬磨し，精神向上の実を挙げ，他日国勢を大成するの基礎を造り，皇国をして宇内の宗と仰がしめん事，是れ当に同志青年の務めならずや，青年大民団創立の主旨亦実に茲に存す。

青年大民団規約

一，志道の大本に基づき常に心身修練を怠るべからず

一，社会の儀表となって濁世浄燈の任に当るべし

一，献身的行動を尊重し苟も軽挙妄動すべからず

一，飽までも正義の味方となり邪悪は些も恕すべからず

一，君国を思うのほか他念あるべからず

一，常に高邁なる志操を持し苟も野卑賤劣の言動あるべからず

一，学問は智徳の精進向上を旨とし爵禄の如きは一切念頭に挿むべからず

中国大陸を視察

青年大民團結成の翌年，大正3年（1914）夏，牛乳配達の代理人も出来たので大学の夏休みを利用して，旅順の長男を訪ね，次に上海に渡り宮崎滔天の兄，民蔵に会い，第二革命中の南京城を守る河海鳴るへの手紙を頼まれて，揚子江を上がった処，南京は張勲が内戦で砲撃中で上陸出来ず，この時，初めて実戦を徳次郎は見た。漢口，漢陽，武昌を見学した。驚いたことは，人口は日本の10倍，面積は30倍というがその人民は，ほとんど丸裸で汚い褌一つで路傍にごろ寝しており，山は全部ハゲ山，河は悉く壁土のごとく濁り，上海の市街の大家高楼はみな外国人の所有で，公園も「華人免進」（支那人入るべからず）の札が立っており，河とゆうより海である揚子江を上下する汽船も英，米，日本船ばかり，その上等客は外国人だけ，支那の汽船は一隻もなく，支那人の客はデッキの上に大根を積んだように重なって寝ている。郵便はフランス人が独占し，大事な港は外人が99年間借りたというて占領しており，何一つ近代産業はない。これでは，英，米，仏の白人我欲の犠牲である。これは昔から革命が

続き，日本の皇室のごとき国家の中心がなく，５億の民衆がバラバラだからだ。そう思えば，印度も南洋もペルシャも近東もアフリカも世界中白人の我欲の犠牲である。これを救うには日本的の宗五郎では間に合わぬ。世界の宗五郎でなければ。それには一人や二人の力では不可能。日本国民全部が宗五郎にならねば駄目であると視野を大きくした。

明石将軍を知る

翌年，大正４年郷里の先輩明石元二郎陸軍中将が朝鮮憲兵司令官から参謀次長に栄転して，赤坂檜町に住まれた。早々牛乳の勧誘に行くと，明石中将は「牛乳はきらい，金をやろう」と言われる。「失礼なことをおっしゃるな，金を貰ったら乞食です。欧州に７年もいて，牛乳きらいで生きられますか？」と承諾させた。明石中将「愉快じゃ，暇の時遊びに来い。ただし夜12時から午前２時の間だけだ」と言われた。変わった人もいると思ったが，１年ばかり話を聞きに行くうちに，この手でロシヤの共産党員をあやつった世界一偉い人と分かった。明石中将は，日露戦争に陸軍，海軍の戦争だけでは勝てぬと，単身ロシヤに乗り込んで革命党に鉄砲何万挺も，弾丸何十万発も買ってやり，レーニン，ガボン，デカンテキー，シリヤスク等をこき使い，皇帝の足下から猛烈な革命をやらせて，足腰立たぬようにやっつけた。秀吉と黒田如水を合わせたような恐ろしい豪傑であることを知った。後に陸軍大将，台湾総督になり，その死後伝記を見るに及んで益々その偉大なるを知り，ロシヤ革命はマルクス，レーニンだと吹聴する日本の共産党員，進歩学者と称する者等の学問と知恵の浅薄なことをつくずく憐れむに至った。

大正４年６月，早稲田卒業，総長大隅候の朱印のある立派な卒業証書を郷里に送ったら，父も母も姉も大変悦んだ。野田卯太郎先生の三井物産入社のお薦めを辞退，同志の学生と，朝鮮，満州，青島を見学して，翌５年５月帰京。同時に月刊雑誌「大民」を創刊した。

中野正剛，緒方竹虎，阿部秀助，小村欣一，山崎直三，永井柳太郎氏等文化人と結びその事務所兼，同志の住居を麻布笄町182番地の２階６畳，下８畳，６畳，四畳半，三畳，玄関二畳の借家に置き更に同志が増加したので，大正６年１１月４日（ソ連革命３日前）国士舘と名付けて私塾を興した。御陰で善友と交わり，良書を読み，良いと思う事は自ら体験し，その結果をたえず反省思索し，誠意，勤労，見識，気迫を内容とする愛国，護国，殉国の精神の涵養を国士舘の精神とした。

子供のころ，父の言った言葉

一，男の児は泣いてはならぬ，首を切られても泣いてはならぬ。

二，嘘を言ってはならぬ，一言でも嘘を言うと男ではなくなる。

母の言った言葉

一，悪い友達とつきあいなさるな，善い友達とつきあいなさい。善い友達とつきあうのは骨が折れるけれども，間違いが起きない。

二，道は遠くなっても本めい（本道）を行きなさい。近路であってもよその（他人）家の脇や，裏の狭い路は通りなさるな。

このような素朴な教えは愚純な貧乏書生（柴田徳次郎）の風雪60年の心の「御守」であった。

松陰祠畔に校舎新築

麻布笄町の大民社本部で開設された国士舘義塾は，志を同じうする青年学徒達が集まって来ていた。当時，官立，私立を問わず血の通わぬ形式万能の大学の政経学部の幣を脱して，吉田松陰の愛国，護国，殉国の赤い血の通う人格の触れ合う夜学をやろう。卒業証書を取るためには，昼間は好きな大学へ通え，真の経世家になるためには，夜間の国士舘に集まれ。と大民誌で宣伝したので，最初は２０～３０名であったが，早稲田，慶應，明大生を初めとして全国各地から次第に集まるようになった。麻布では手狭であり，教育の場所としては適当でないため，どこか適当な土地に塾舎を新築する 所はないものかと敷地を探し始めた。初めは井の頭に坪5円で１１万坪（現，成蹊大学）を売りにだしていたので，５万円手金を打ったが，大正７年１０月２７日松陰神社で国士祭を行なって奉納相撲をやった。又，松陰神社に詣でて和歌を作り浪々と朗吟した。

留めおきし大和魂時を得て
　　たぎる血しおか匂うもみじ葉
幾十歳官居に寄せしまごころの
　　今日一しおの山もみじかな

現在の松陰神社

こういった縁で，神主が１～２万坪なら隣に土所がある，お世話しましょうと云う。（松陰神社の隣には毛利候の地所が２万坪ばかりあった）広くても井の頭のような歴史のない所よりも１～２万坪でも中学時代から私が私淑してきた吉田松陰の暮畔の霊境を取ろうと，相談一決してこの所に塾舎の新築にかかった。しかし隣の毛利候の菜園だけでは敷地が足りない。晴耕雨読で農耕もやり勉強もやる為には，毛利候の空き地の他に校舎を建てる土地が必要であった。そこで芝中時代の同級生で世田谷村役場に勤める仁戸田胤雄という友人を訪ねて，「この前の寺の東の空き地に学校を建てたいのだが，何かうまい手は無いだろうか」と相談をもちかけたところ，仁戸田氏は「それは僕の母の里である勝国寺の所有地で，目下空いているから交渉してみよう」といって早々交渉してくれ，快く話がまとまった。次は建築費であるが，これに対しては，頭山翁はじめ同志が協力してくれて塾舎構築資金は大体準備出来たが，講堂を建てる資金がどうしても500円足りなった。そこで高利貸しのところに行って借りて愈出来上がった。この世田谷塾舎新築のため柴田徳次郎自ら資金集めや建築の指導監督に当たられた。又，花田大助氏や山田悌一氏の苦労も一通りではなかった。

地鎮祭には，頭山翁立ち合いで，私が真新しい30尺の支那絹を（まわし）にして「世界万邦一緒にこい」といって四股を踏んだ。周りにいた同志来賓達もその気迫に圧倒された。その時頭山翁は，その傍で左手を懐に入れ，右手にステッキを鷲づかみにして，本当に天から降りて来られたかと思われる風を満身漂わせながら，

「天下は自ら任ずる者の天下じゃ」と一同を激励された。

創立時　前列左より　頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一
後列中央　徳富蘇峰一　　右 柴田徳次郎

国士舘高等部開校

大正8年10月末に講堂，道場，学生寮，本部（事務総局）の4棟が完成した。11月4日財団法人となし，文部省に関係なく全く新しい全寮制の昼夜一貫の自由な私塾として館長柴田徳次郎，学長に長瀬鳳輔氏を定めて 全国的に募集を始めた。20名位集まった。

入学試験は9月上旬に，入学許可通知は9月15日に行われた。入学試験の人物試験（面接）の時に試験管の中に人相鑑定者を入れておいたことがあった，館長らしい着想がうかがわれる。

学校の組織は経営者は財団法人国士舘とし，校名は「国士舘」，校名については，「憂国の志士の集まり」から取ったか，「国士無雙」の書に由来するとか，「史記」によるもの等諸説があるが，3年制の高等部を設置することにした。3年制の高等部というのは，当時の学制から見ると，旧制高等学校か或いは大学の専門部という程度のものに当たるのであるが，国士舘は一切文部省の監督を受けずに，専ら国士的人物養成を目的としたものであったので文部省認可の卒業証書等は交付出来なかった。当時定められた国士舘高等部規則は次のとおりである。

目的

一，本館は国士たるべき人材を養成するを以て目的とす

入学及び資格

一，中等教育程度の卒業者にして，特に人物の撰衡をなす

一，入学は保証人1名の連書を以て願書（形式なし）を差し出すべし

といった程度のものだった。又，学生は全員寮制とした。

当時，指導教官だった喜多悌一氏（山田悌一先生）は学生の教育は，一日2時間の学課の外は農事，武道鍛錬，飽くまで精神的薫陶（くんとう）を主とし，ここでは面倒な箇条書は教えない「油断大敵と自己反省」の二訓だけと言っている。大正8年11月9日国士舘落成式ならびに開館式が挙行された。その間大正9年教員住宅を10戸と，大正10年2階建ての100名収容出来る学生寮を作った。

館長欧米視察

大正10年10月，渡米し11月ワシントンで開催される日，英，米，仏，伊の海軍軍縮会議を視察，ハーデング大統領夫妻の招宴に臨み，巨人ブライアン，セネター，ボラート会談，国務卿ヒュースの会見には20数回出た。次いでその12月末，英国に渡り，スコットランド，アイルランド，を見て，フランス，ベルギー，オランダ，ドイツ，スイス，イタリア，モナコを周り再びイギリスに渡り，開会中の議会を見て，イートン，ケンブリッジ，オックスフォードなどを参観，大いに学ぶ処あり，印度洋

を航行してセイロン，シンガポールを視察して4月に帰国した。

館長はこの欧米視察は私がすでに日本を知り，而も頭の柔らかい年頃であったから視野と見識を世界的にし，大いに国士舘の発展に役立ったと語っている。

中学校設立

校　舎

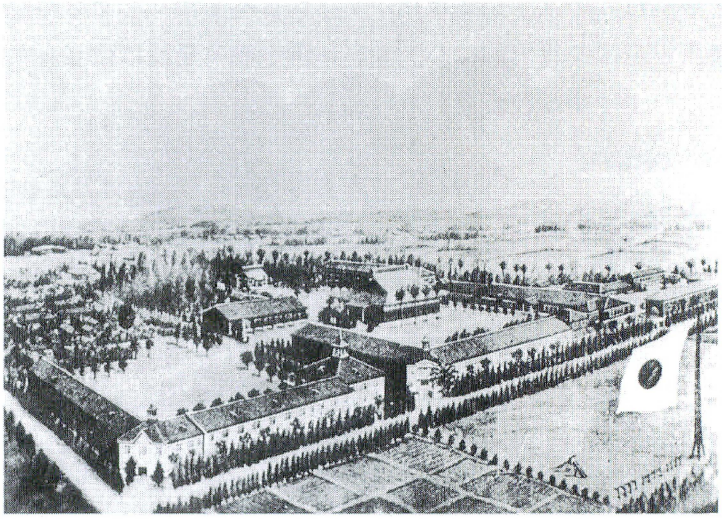
理想の教育は少年からと痛感し，大正12年4月文部省の認可をとり校舎を増築して中学校を開校することになった。初代校長は長瀬鳳輔氏であった。

商業学校設立

中学校が出来て校舎も整った。出来てみると中学は昼間のみで夜間がなかったので，夜間は空いていた。館長は「これは勿体ないことだ。近所の子弟のために農業や商業の夜間塾の様なものに利用してはどうか」と世田谷村の大場信続氏に相談してみた。ところが近郷近在には農業，商業に従事して，中学に行かれない子弟が相当いるから「それでは中学の校舎を夜間貸して貰い」ということになり，世田谷が主となり駒沢，松沢，玉川，目黒，碑文谷の6ヶ村が共同経営することになり各村より1年に3万円宛拠出してその経費に当てることにして大正13年4月開校した。塾長には世田谷の大地主で農学博士の大場信続氏がなり，科目は農業と商業を教えていた。その間生徒数もだんだん多くなり素人では運営が困難になって来たので，経営を国士舘に移管することになり，正式に文部省の認可をとり国士館商業学校として大正15年4月より公式に開校し，生徒を募集することにした。校長は引続き大場信続氏が就任した。

専門学校設立

昭和4年4月1日に専門学校が設立された。この専門学校は京都の武専に匹敵するもので，武道の修練を主とし，優秀な師範を迎えて柔剣道と国語と漢文の授業を行い，卒業後は中学校の柔剣道師範または国漢文の教師になれる資格を与える教員養成学校であった。全寮制で朝夕の稽古は厳しく充分な錬磨が出来，成績も優秀であった。



昭和4年当時の校舎全景

高等拓殖学校開設

昭和5年にブラジル開拓を目的として高等拓殖学校を作った。校長には満州で知り合い国士舘に同志として協力して下さった上塚司氏がなった。上塚司氏は衆議院議員であり，政界でも顔がきくので先ずブラジルを視察し，大統領に会い，アマゾン下流域の開拓を受け，約100万町歩の土地と5000人の入植許可をとりつけた。そこで大々的に移民開拓事業を進めることが出来るようになった。そこで上塚司しは，国士舘の専門学校の一室を借りて教育するようなことでは間に合わないと思い，自ら資金を調達して昭和6年7月に登戸の川岸に約3万坪の敷地を求め広大な校舎を新築して，日本拓殖学校という名をつけ国士舘拓殖学校の延長として独立した。しかしブラジル開拓の学校を初めて作ったのは館長であり，国士舘で養成された1回，2回の卒業生が最初にブラジルに入植して世界で初めてアマゾン開拓に着手した事は，日本人のアマゾン開拓の創始者として高く評価されるべきものとおもわれる。

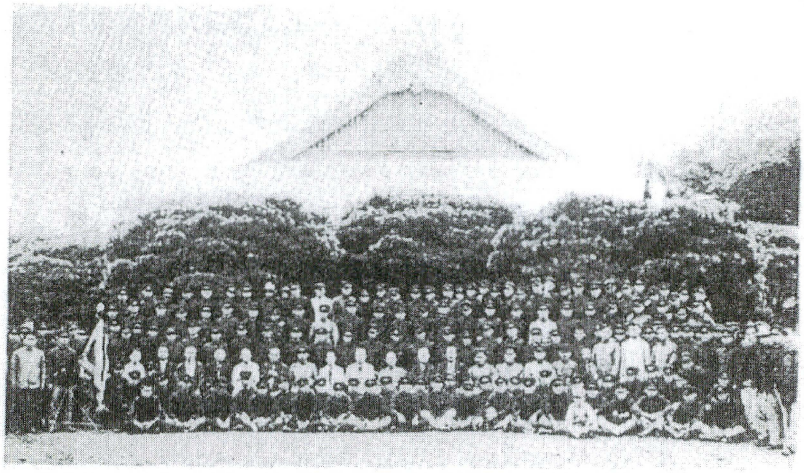
1979年，団長柴田梵天（当時総長，現館長），副団長鈴木善一氏，総勢35名で，アマゾン開拓50周年式典に私も出席したことがあった。当時まだ健在であった，第1回アマゾン開拓指導教官の越智栄先生の貴重な話を聞く事が出来た。越智先生はアマゾン河口のベレンという所に入植したが，先生は，ここは熱帯雨林気候で一日中サウナに入って居るようで慣れるまでは辛かった，食料がない時は小舟を出してアマゾン川をさかのぼると，船のカイにワニの頭がコツコツ当たる，それを取って食べたり，ヘビ，陸ガメ，口に入る物は何でも食べた，又，今更日本に帰りたくは無いが，毎年

日本の桜とサツキの花を見たいと思い，息子（現ベレン病院長）に日本に行くときに頼んで取り寄せて庭に植えたが，樹は大きくなり葉はいっぱい繁がいっこうに花が咲かない，考えてみればここは年中真夏だもんなーとニコニコしながら話してくれたのを思い出す。先人の大変な苦労と望郷の念の一旦を感じさせられた話だった。ちなみに2008年は日本ブラジル移住100周年の年にあたる。

鏡泊学園開設

昭和8年4月満州開発のため「満州鏡泊学園」を創設した。その目的とするところは，館長の再度にわたる満州，支那大陸の視察の結果，人口過多の日本はどうしても満州に若者を送り込み，あの広大な土地に農業を通じて満州建国の理想達成に貢献する実際的人材を養成するにあった。時は正に満州事変後で，治安も大体回復した時であったので吉林省の鏡泊湖畔に鏡泊学園を創立し開拓移民のさきがけをしようということであった。

昭和7年12月には全国からの学生募集を朝日新聞に出したところ，内地はもちろん在満の青年からも応募が集まり350名に達した。



第一期学生全員（大講堂前にて）

入学試験は昭和8年3月世田谷の国士舘で行われ200名が合格した。そこで4月から7月までの4ヶ月間の準備教育を行った。授業は，満蒙事情，開拓の基礎知識，支那語，体力気力の養成のために，専門学校の生徒と一緒に柔道や剣道の朝夕の稽古もやっていた。　鏡泊学園の運営費は館長と山田悌一理事の努力により，三井，三菱，住友の三大財閥と満州国から年額5万円の援助を受ける契約をとりつけた。山田悌一氏は，宮崎県都城出身で拓殖大卒業後25歳の時満州でパプチャプ事件で活躍し，青年大民団時代は経理を担当し，国士舘創設に尽力された一人である。

昭和8年8月1日，一同は歓喜の声に送られて国士舘を出発，8月8日には吉林省鏡泊湖の南約60キロにある敦化に着いた。ところが匪賊の出没が激しく治安が悪いので，しばらくここで待機することになり昭和9年2月までの長期滞在となった。関東軍の数次に亘る討伐の結果ようやく治安も回復したので，同年2月23日と24日の2回に分れて敦化を出発し待望の鏡泊湖畔に着いた。（琵琶湖の約5分の1ぐらいの大きさ）鏡泊湖付近は，広漠たる大平原の大陸には珍しく湖あり山あり川あり滝もある風光明眉な環境である。直ちに借り上げた満人家屋に入り，寄宿舎や校舎が出来るまで起居しながら開拓の準備をしていた。

山田悌一先生

昭和9年2月から作業が始まり，学園の建設も漸く軌道に乗りかけて来た時，昭和9年5月16日突如として学園長山田悌一先生戦死の訃報が携行の伝書鳩によって世田谷の本部に伝えられた。この時戦闘で職員2名，学生5名，警備兵5名計13名が全滅してしまい学園は中途にして中止のやむなきに至った。しかし約30名は最後まで鏡泊湖畔に留まっていたという。

陰謀家の煽動から騒動へ

昭和6年に満州事変が起こり，愛国学生運動が起こり，館長は善いことと思い，これに専門学校の生徒を加盟させたところ，動機は愛国らしいが知恵に欠き適当と認め難いことなどがあったので，国士舘の学生を脱退させた。そのことが，いわゆる愛国ばやりの際とて非愛国行為と避難の的となり，黒龍会会計主任と称する末永一三が陣頭指揮をして，金は俺が幾らでも出すと煽動して共産革命づくりの学校騒動となった。専門学校長の水野錬太郎氏にその処置を相談したら，彼は「柴田もここまで成功したから，他に転向したがよい」学校のことは山崎達之輔君が「任せとけ」というから，僕も「学校には当分出ぬ」と言う。館長は初めて，これは大変な魂胆ありと悟ったがあとの祭り，東京中の暴力団が束になって脅迫してきたが，館長は頑として屈しなかったので，偽りの評議員会の決議書で，正当理事を解任して，偽りの理事を登記したので裁判となった。この騒ぎは，昭和8年5月から昭和16年3月まで約8年間もかかり，遂に松野鶴平，緒方竹虎，小坂順造，松田道一，山崎直三氏等が正当理事に入って館長を助けた。裁判所で末永一三に11万円，副島義一博士（学校の邸内に寄居）

に1万5千円をやって厄払いをした。その後館長は「この事件は反館長派の先生達の国士舘乗っ取りを企画したものであった。盗人に追銭して解決した。これは金銭上の損害よりも，大切な学生を迷わせたことで，取り返しのつかぬ断腸の痛恨事であった。館長の馬鹿げた他人を過信する小児病はこの時根治したよ」とよく話されていた。そのため，その後，戦時中から右翼を寄せ付けず，敗戦後は左翼も近づけず，中正堂々，天地の大道を闊歩された。この事件解決と同時にすべての校長は館長が担当することにし館長の方針通りに運営された。この間昭和14年から緒方竹虎，松野鶴平，岩永祐吉，小坂順三氏等の後援で，日刊大民新聞を再刊し有名な新聞人の坂口二郎主筆で「排共産，排反動，排独善」の標語を掲げて館長は社長となって主宰し，20年5月の空襲で全滅するまで，軍部の暴走を喰い止めんとしたが力及ばなかった。

再建から5年目空襲にて殆ど全焼

かくて事件解決と同時に，全部の校長を館長が独占して，国士舘を建て直したが，5年目の昭和20年5月25日夜の空襲で30年間で建てた校舎も館舎も5時間で焼失，焼け残ったのは大講堂と剣道場と寮の一部だけだった。館長は全教員学生を集めて，「これまでは一人の柴田が建てたが，今は幾千の諸君柴田がおる，戦争は必勝，必ずトルーマン，チャーチルを捕虜にして土下座させて再建する」と威勢のいい演説をした。ところが70日目に広島，長崎の原爆，80日目に陛下の終戦の御言葉。時に館長55歳であった。

昭和20年8月15日，日本は無条件降伏を迫られ，遂に終戦となり，アメリカの日本占領軍総司令官マッカーサー元帥の支配下に置かれ，各学校とも戦時中の軍事訓練は廃止され，勿論武道も一切禁止となった，国士舘もその名称を改名せよとの勧告を文部当局から受けた。そこで，学校の名称をどんな名称にするかと研究したが，本学の顧問である文豪徳富蘇峰先生に相談したところ，先生は「至徳学園」が宜しかろうといわれた。これは，論語にある「天道至教聖人至徳」からとられたもので，本学の教育方針と一致するものであるとの理由で至徳学園と改名された。館長は徳富蘇峰の仲間ということで追放された。

館長追放後の学校経営は一時鮎沢巌先生を校長とし，柴田梵天先生が理事長となり兼校長事務扱いとなって経営に当たられた。その間館長は電気もない鶴川農場に住み，農地法を盾に林野を奪いにくる魔手を5年間撃退して3万坪を確保した。昭和27年7月館長は追放解除となり，本学に復帰され，校名も再び元の「国士舘」に改め館長が理事長中学，商業専門学校の全校長を一人で兼任された。これまで鶴川で確保した3万の土地を昭和27年から逐次国士舘に寄付して同28年に短大開設，32年体育学部開設，36年政経学部，37年工学部を開設と，10年間で以前よりも立派な鉄筋造り

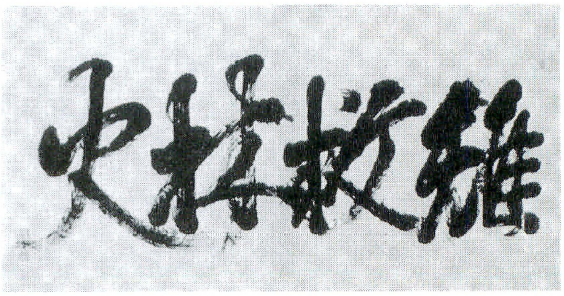
の校舎が増築された。5階建ての高楼には大日章旗が翻り，世田谷は占領中赤の巣で，汚い赤旗ばかりであったが何時の間かにか一本もなくなった。

緒方竹虎先生の戦災復興支援

館長は追放中，日曜毎に同じく追放中の緒方竹虎先生の処を訪れ，日本の再建を懇談した。先生は追放が解けたら政界進出を説いた，そして「政治はやらぬ，世界を視察してきて著述をやりたい。今10年は生きたい」と語られ，私は「10年間は敗戦学校に入り，死んだ振りして修養する。学問と徳は開祖の僧に及ばぬが，法然，釈迦の80以上，天海の109歳を凌ぐ覚悟」と悟った。緒方先生が政界に立たれると，国士舘再興を援助しようと同志に呼びかける趣意書を書いて下さり，松野鶴平，松本健次郎，高島菊次郎，倉田主悦，石橋正二郎，出光佐三，安川第五郎，石井光次郎，野村吉三郎，野田俊作，植村甲午郎，高杉晋一先生をもって維持会員をお作り頂いた御陰で，破天荒の国士舘が実現した。

館長は焼け野原に立って，敗戦日本の再興は国士舘同志の双肩にかかる。然るに焦土と化した国士舘の再建は天に昇るより困難であると痛感した，昔読んだ「雉救林火」と言う仏教書の「大きな山火事で広大な森林が猛烈な勢いで燃えだした。それを一羽の雉が気狂のように水を汲んできて消しておる。それを天上からご覧になった神々が不思議に思われ「お前は何をしているのか」と尋ねられた。すると雉は，この森には長年月私共の一族達が育てられ住せてもらっている。それが大火事になりましたから衆生済度のため一生懸命消しておるのです。」神々はあきれて「たった一人でか，いつまでかかって消すのか」雉「死をもって期す，死ぬまでかかって消します。」と答えた。それが実に真剣であったので，神々が「これは本気だ，皆で助けてやろう」と相談一決お助け下さったので，さすがの山火事もたちまち消し止められたと言う「雉救林火」（きじ林火を救う）の譬（たと）え話を思い出し，「そうだこれだ！」と感じて精神をこめて墨をすり，大きな紙いっぱいに「雉救林火」と書いて講堂に掛けた。この事は，私が大学生時代昭和44年館長訓話で聞かされた。又，その他に牛尾になるな，鶏頭になって叫べ。などの言葉も聞かされた。

館長（私は），校舎の復興だけを目的とせぬ，教育の内容を最も重要と考えている。焼ける前の専門学校時代は，手習草紙であり，あれは戦火で焼き払って大学にしてから本格の国士舘教育の清書である。私も70不惑の信念で諸君



大講堂内の額　キジ．リンカオ．スクウ

と共に勉強すると語られた。

今，東京の大学は（1965年－1970年頃），国立も私立も「赤旗はソ連の金の領収書」と言われて，赤旗振ってスト，ピケ，デモ，テンヤワンヤの乱痴気精神病院に墜落しているが，国士舘大学だけは先生も生徒も一人残らず柴田館長と一心同体で，誠意，勤労，見識，気魄でわき目も振らず勉強するから，日本は神国であるから神々が緒方先生や顧問維持会員のお姿で現れになり「国士舘の雉は本気だぞ，ほって置くと焼け死ぬぞ！皆で助けてやろう」とお助け下さって居る。

顧みれば私（館長）が13歳で差し押さえを受けた時に「これは貧しい故だ，金が欲しい」と金に心を奪われたらどうであったろうか，私は我が身のつらさから人の身のつらさを思いやり，身も家も投げ出して日本中の貧しい人の為に尽くそうと仏教の「菩提心」を起こしたことが，神の導きであってそれが今日の国士舘となり，百億の金でも出来ぬ事が出来たと心から感謝する。この私の家の差し押さえから42年後に日本国民全部がアメリカに差し押さえられ，軍事占領された。それを取り返すためには，日本再興のカギもここにある。「所得倍増」などという浅薄な物質論では不可能と痛感する。

私を郷里に居られぬように苦しめた逆境，東京苦学時代の悪党共，大民社時代の悪浪人，学校騒動の右翼暴力団も敗戦も追放も共産党の集団暴力も悉く私を磨かせ，国士舘を玉と磨かす為の貴重な砥石として神々の慈悲深い賜物であったのである。私が疑った孟子の「舜は犬畝の中より」の章の「天の将に大任を是人に降ろさんとするや必ず先ず其心を苦しめ其筋骨を労し其大膚を餓やし其身を空乏に」云々は，実に至上の真理であると心から信じて疑わなくなった。

実に国士舘は他の有名な大学と違い，創立者学長の私は全く無名，無学，無徳の老学生である。唯，諸君より「1日長」たるにすぎぬ。然し乍ら，福沢先生は68歳で御長逝，大隅候は85歳で薨去，それはお二人共早稲田，慶應創立40年の歳であるのに，国士舘の私は，神々が「今は日本歴史にあってこのかた一番大事な時である。今死ぬ事は許さぬ，日本を再び世界中の人々が心から天皇を頂く国だけあって，敗戦の国難で反って磨きがかかり，立派な国になった。流石は日本人は偉大な国民だ。遂に赤旗などは一本もなくなり，日の丸の旗だけが太陽と共に翻って居ると，心の底から感服，尊敬するまで奮闘を勉強を怠るな」と叱咤激励して居られる。普通の大学では45周年は関係者で祝うが，国士舘は共産党の赤旗を一本も無いようにして日本国を本当の姿に返してから，50年祭を全国民と共に祝おう。

館長清話

皇室を尊び祖国を愛す

我が国は，皇祖国を肇められてよりこのかた，歴代の天皇がこれを統治せられ，国民もまたこれを翼賛して一体となり，義は則ち君臣，情は則ち父子の麗わしき団結を以て，産業の開発に，文化の発展に努力し，大和民族をして今日の盛況に導くために絶大なる貢献をして来たのである。かくて忠孝一本の美風自ら生じ，我らの祖先はこれを実践して来たのである。故に皇室は我が大和民族発展の中心であり，原動力であらされたのである。この皇室に対して敬愛の誠を捧げるのは，報本反始の精神にあつい日本人として当然の情であり道であると思う。

家を愛し郷土を愛するは人の情である。祖国を愛しこれを護ることまた然り，上に万世一系の聖天子を戴き，風土人情の美を併せて，世界に冠たる我等の祖国を愛し，誇り，これを護り，更によりよき祖国として子孫に之を引き継ぐのは，我々現代人の義務である。我等は国難に際しては，身命を賭しても祖国を護る決意と気魄とを持たねばならない。祖国を他に求めて，この伝統に輝く祖国日本を顧みない輩は国家の蠹賊（とぞく）である。外国は国が出来てから統治者（王又，は大統領）が出来たものであるが，我が国は，天皇が先ず前に出来てから後に国が出来たもので，外国とは国の成り立ちが全く異なっていることを，よく認識して国家と天皇との関係を考えなければ日本の国体を本当に理解することは出来ないのである。

人間と禽獣（きんじゅう）との異なる所以

一，吉田松陰の考えていた人間と禽獣の区別は次の通りである。

吉田松陰の経営した松下村塾の教育方針とも言うべき「士規七則」の中に次ぎのような文句が揚げられている。すなわち，凡そ生まれて人となる，宜しく人の禽獣に異なる所以を知るべし。蓋し人に五倫あり，而して君臣父子を最大となす。故に人の人たる所以は忠孝を本となす。

これは松陰が人間は鳥やけだものと異って万物の霊長であるから，人間らしい心掛けが必要であるとして教えたものである。そして人の道には古来五倫というものがある。

五倫とは，

1，君臣の義
2，父子の親
3，夫婦の別
4，長幼の序
5，朋友の信

を指し孟子にある儒教の教えである。

二，柴田徳次郎館長は人間と獣の区別を次ぎのように説明された。

1，反省・懺悔（さんかい）

獣は汚いことを知らず，掃除をしない。人間は汚いことを知り，掃除をする。

人間は自分の行いを反省して再び間違いを起こすまいと決心し懺悔をして心の掃除もする。

2，同情・救助

獣には同情心がなく，弱肉強食である。

人間は気の毒な人を見れば同情し，救助の手を差し伸べる。

3，感謝・報恩

獣は恩を知らない。キリストの言葉に「また真珠を豚の前に投げるな，恐らくは足にてこれを踏みつけ，向き反りて汝らを噛みやぶらん」とあり，豚は恩を仇で返す。

（イ）天皇様の恩

（ロ）先祖の恩

（ハ）生みの親の恩

（ニ）育ての親の恩

（ホ）先生の恩

（ヘ）国家の恩

人間にはこれら多くの恩に感謝し，これに報いようとする報恩の心がある。

4，尊敬・祭祀

獣は相手が自分より強いか弱いかだけしか考えていない。

人間は親，兄姉，先生の目の上の人を敬う。

さらに学問が進むと国家，社会に尽くした方々を敬う。そして，これらの人々が死なれた後も墓や仏壇にお祭りをする。

日本国家を起こし，国民を繁栄させて下さった方々に感謝尊敬し，これを神社にお祀りする。＊神武天皇は橿原（かしはばら）神宮　＊明治天皇は明治神宮　＊その他国家のために尽くされた方々は靖国神社をはじめ，全国至る所にお祭りしている。則ちこれを祭祀という。

三，以上，人間と獣との区別として（1），反省・懺悔（2），同情・救助（3），感謝・報恩　（4），尊敬・祭祀の諸徳目を挙げたが，これは日本民族の伝統であり開国以来永年の間にはぐくみ育てられた醇風（じゅんぷう）美浴であり，日本の国風でもある。我等はこの国風を守り万物の霊長としての立派な人間にならねばならないと思う。戦後の風潮を見るに，自由と放縦とを穿き違い，利己主義に走り，自分さえ良ければ他人の迷惑など考えず，自分さえ安全であれば国家なんかどうでも良いなどと考え，万物の霊

長たるべき人間が遂次禽獣化しつつあるではないかと思われる節もある。
日本民族には立派な民族精神と伝統とが」ある。これを護り，さらにこれに新知識を加え，万古不易の日本文化を築きあげたいものである。

自分（館長）は母によって神を信ずるようになった。そして頭山翁に接するようになって，はじめて大人君子というものがあることを信ずるようになり，日本という国を世界の他の国々と比較して見て，字内に真に愛すべき国家日本のあることを知った。

国士とは将棋の駒の「歩」の成ったようなものである

将棋の駒は，王将を中心に金・銀・飛車・角・桂馬・香車・歩からなっており，「歩」は最前列に並ぶ一番下の役目のものである。

ところが，いざ戦争となると，その歩が前進し，適地に入ると金になる。すなわち「成金」といい，金将と全く同じ働きが出来るようになり，敵の王将をも打ち取ることが出来る。敵にとってはこれほど油断のならない存在はない。まさに向かうところ無敵の強さを発揮する。

この歩が「金になった」ような人物が国士であり悟った者と言えるのである。

人間には生まれつき金持ちの家に生まれたり，貧乏な家に生まれたりして，必ずしも平等ではない。金持ちの家に育った者は，何不自由なく子供の頃からチヤホヤされて，苦労しない環境で育つので，大体は我儘で，自分勝手で，他人への思いやりなんて心の持ち合わせが少ない者が多い。これにに反して貧乏な家に育った子は，物質的には勿論精神的にも常に劣等感を感じ卑屈に成りやすい。しかし根性のしっかりした者は，よく困苦欠乏に耐え，刻苦精励して，身を立て家を興し国家社会，人類のために貢献出来るような立派な人物もできる。こんな風に若い時に苦労をした人は，心が練れているから，盤石不動の信念を持ち，人情の機微にも通じ，人の統率力もあり，人間が出来てくる。若い時の苦労は進んでした方がよい。人間が練れてくる。すなわち金持ちの子がわがままに育ち人生の苦労を知らないのは，もとからの「金」のようなもので，苦労してたたき上げた者が「歩の成り金」である。こんな人間に成ることが出来れば，「国士」であり，本当に悟った者といえるのである。

やわら（柔道）とりや（剣術）つかいは掃くほどいる。しかし国士舘の学生は，真の「国士」にならなければならぬ。

武道の極意神髄を体得した真の武道家は少ないものだ。国士舘の学生達が修行している武道は「興国救人」の国士になるための武道であるから，技術の末にはしり，勝敗のみに血道をあげるような武道であってはならない。武道の極意神髄を体得して，盤石不動の信念を堅持し，あせらず怖れず「自ら省りみて正しければ，千万人と雖（いえど）も

吾往かん」という腹のすわった大人物にならなければならないのである。

篤（とく）農家の心掛け

篤農家は草を見ずして草を取り，
中農家は草を見て草を取り，
楕（だ）農家は草を見て草を取らず，

良い作物を作ろうとするためには，先ず肥沃な土壌を作らなければならない。ついで成長し始めた苗を，すくすくと発育させるためには，発育の邪魔をする雑草を取り除かなければならない。人間の育成もまた然りである。青少年・学生が，悪友等に誘惑されて，不良化すなわち悪の道に入る徴候が見えたら，直ぐに呼んで事情を窮明し，悪友を整理し，正常の勉強が出来るように指導することが極めて大事なことである。先生に注意される迄もなく，自分で日々の行動を反省し，正しい道を進むようにすべきである。

その他，世の中にはいろいろな悪の芽がある。泥棒，婦女暴行等の個人犯罪から，日本を共産化しようなどとする赤軍派の革命行動に至まで，このことは他人に迷惑を及ぼし，国家社会の安寧秩序を破壊しようとするような大きなたくらみに至るまで，これを未然に防止するためには，草を見ずして草を取るの明がなければならないと思う。

父母，教師，政治家等は，特に常にこの心掛けが必要であると思う。

館長朗吟集

「大正６年」

大阿蘇の然ゆる焔の只中に
　　桜と匂え大和男の児は

家も世も人の建てしは住みにくし
　　建て直してぞすまはせやせむ

「大正８年国士舘新校舎落成の時松陰墓畔楓の紅葉」

留めおきし大和魂時を得て
　　たぎる血しほか匂ふもみじば

「大正10年ワシントンにて」

神われとともにありてふ心こそ
国をも興し世をも救はむ

「昭和22年」

切られても打ち伐られても楢櫟（なら・くぬぎ）
芽を吹き茂り株根はるなり

いもや薪重げに負ひて這ふごとく
よろめきながら買出しの人

あまそそる富士の高嶺も鄙山（ひなやま）に
隠れてひくし鴨川の里

われに克て万難に勝て親知らず
子知らずの世を救う我友

食うことのほかはすべてを忘れたる
このはらからを誰か救はん

玉も石もともに焼かるる世なりとも
磨け若人大和魂

「昭和35年」

たゆみなくのぼらばついにふみこえん
よし那弥山のいかに高くも

「昭和35年デモ騒ぎを見て」

風吹けば枝葉さわげど幹と根は
いと静かなり小木も大樹も

夏なれば群がる蠅も天すみて
秋風たてば跡方も無し

飛べよとべ嵐を突いてジェト機よ
風恐るるは破れ飛行機

「昭和39年8月伊香保榛名山に籠り日本はこうすれば立ち直るを執筆して」
雲を抜く榛名が嶽に籠(こも)り居て
ものせし文ぞ国興こせ文

あとがき

私は，国士舘入学時から2年間ではあるが柴田館長の訓話を聞くことが出来た。一年生の時全学部剣道場に集められ，正座のまま1時間話を聞いた記憶が今でも鮮明に残っている。又，館訓を聞いて感想文を提出して合格しないと実践倫理の単位を貰えなかった。

館長の話は，第二次世界大戦でアメリカを初め西洋の強国を相手に日本は戦った。それはアジア諸国を属国として植民地化し，人民を奴隷にしたがゆえに，奴隷解放戦争をした，そして20億の奴隷にされていたアジアの同胞を解放に導いた，実に，人道上尊い大戦であった，諸君達のお父さんお爺さんがなされた事は実に偉大な事であり，神業である。諸君らの身体にもお父さんお爺さんの血が流れていると思う。そこで，日本人特に諸君達は非常な責任がある。日本はアジアの奴隷解放という大仕事をしたため，自分自身に大怪我をした。即ち千島，樺太をソ連に取られ，満州を支那に取られ，朝鮮を南北に分けてアメリカと共産側に取られ，台湾を蒋介石に取られたのみならず，広島，長崎に原爆を落とされた。又，敵の占領軍司令官マッカーサーが日本人を6年間捕虜にし，その捕虜収容所規則を（日本国憲法）と言って押しつけた。それお馬鹿な学者や文化人と名乗るものが平和憲法などと言って有り難がって学生に教えている。又，天然痘ともいうべき共産主義者は日本はほとんどいなかったが，監獄に20－30人いたのをマッカーサーが引っ張り出しておだてて伝播させた。その後彼等はソ連，中共から加勢を受けて夢中に騒ぎだした。それを政府も知らず，文部省も知らず，大学などはなお知らず，ただ国士舘だけが知っている。だから国士舘には共産党に入る者など一人もいない。国士舘の学生は文武両道の精神によって，賢い，強い，そして優しい人にならなければならない。と，いうようなお話を滔々と力説された。又，昭和39年に出版された柴田徳次郎著の「日本はこうすれば立ち直る」の中に，政治について今は昔（明治，大正期）と違って有権者さえ自覚すれば立派な政治が出来る事に成っている。ところがなんと，有権者の政治に対する考え方はいっこうに戦前前と変わらず，百年前の徳川の末，維新の時と変わらず，800年前の源氏，

平家の時代と変わらず，職業派閥の政治家に「あなた任せ」になって，情けない実情であります。と述べられている。館長の考えを，まとめると，

一，反共の精神，国士舘は皇室を尊び，国を治め，世界を平和に導く為の教育をしているのだから，皇室を無くそうと考えている共産党など左翼的な考えをもってはならない。

一，殉国の精神，願わくば国の礎国士舘とは，祖国を愛すること，愛する国を作る為には，正しい誠意，勤労，見識，気迫を忠実とする精神で努力しなければならない。

一，伝統を重んじる事，皇室，国歌「君が代」，国旗「日の丸」は我が国の誇りと思い，良い伝統は守って行く心構えが必要だ。

一，誇りを持て，大東亜戦争は人道上尊い戦いであった，アジアの民の独立を助けた，その，戦った祖先の血が君達の中にあるのだ。靖国神社参拝は欠かしてはならない。

一，日本国憲法の改正，この憲法は押しつけ，捕虜収容所規則憲法で日本人をていたらくさせて来た，早急に日本人の手で新しい憲法を作るべきだ。

一，国士舘の教員が学生に対しての教えは，１，愛情　２，智恵　３，励まし　４，希望　学生は先生に対して，１，尊敬　２，感謝　３，信頼　４，服従の真心で勉強し国士といわれる人になれ。

一，武道の鍛錬により腹の据わった人材を養成する，自立独立の精神，不屈不撓の精神を養成する。

晩年の柴田館長

参考文献

風雪七十年　柴田徳次郎講演禄（二十一世紀を担う若人に送る，私の歩んだ道）
信念と気魄の生涯　（国士舘大学同窓会）
柴田徳次郎言論集　（国士舘大学）
日本はこうすれば立ち直る　（柴田徳次郎）
徒手空拳の立ち上がり　（柴田館資料室　今坂節也）
先師禄山田悌一伝　（野田美鴻編著）